

靴の歴史散歩 ⑨〇

皮革産業資料館 副館長 稲川 實

団扇絵に描かれた、文明開化の先駆け商品について「外套」(インヴァネス)、「^{ころう}蝙蝠傘」、「靴」、「帽子」の4点は、すでに前号で紹介済みなので、今号では最後の1点、主題の「靴」ということもあって、詳細に述べておきたい。

この靴(写真参照)は、当時「紳士用深ゴム靴」とか「紳士用礼装靴」と呼ばれていたものである。また業界では、甲革部分が七つの裁断型で構成されているところから、別名「七つはぎ」と呼ばれていたが、今はもう死語に近い。

現在のデザイン分類では「サイドゴア・ブーツ」。解説に「足のくるぶしより深く、履き口の両側に、V字型またはU字型の切り込みを入れ、幅広のゴムを縫い込んだ深靴。」とある。

明治31年10月の『風俗画報』の「流行門」に「深ゴム入靴 深形の靴にて、両側に^{わづら}ゴムを縫い込めば、編み上げの如く決して煩わしからず、これに加え少しばかりの雨降りにも、長靴の代わりもすべく、至極体裁良し。価格は油革にて四圓位より上等八圓位まで。」とある。

完成されたシンプルなデザインに加え、着脱自由という機能性もあって、明治から

大正、そして昭和初期まで変わることなく、履き継がれてきた紳士靴の逸品である。

今のうちに、古い履きものを蒐めておこうと思い立って、間もなく骨董市で見付けた靴だから、もう収蔵歴40数年にはなる。

甲革は、高級素材の黒キッド(子山羊革)で、本底に「松屋」の刻印があるので、百貨店の靴売場で調製したものらしい。ミシン目もまことに細かく美しい。底付けの「押し^{ぶち}縁」も、10mm間に7針は数えられるから、相当腕のいい職人の仕事である。

この靴を保管するためのシューキーパー(木型状保型器)も見事なもので、むかしの職人技にほれほれさせられる。

幸いこの木型には「型寅」という、制作者のゴム印があったのでうれしかった。当時、久保田寅之助創業者もお元気で居られたので、早速お見せしたら、聞くなり中の木型を取り出し「いま、これを作れといわれたら、一体、いくら掛かるだろうねー」と、懐かしそうに撫でていたのを、昨日のこのように思い出される。

現在この靴は、皮革産業資料館に寄託され、常設展示しているのでぜひお立ち寄りご覧いただきたい。



大正期の紳士用礼装靴



木製のシューキーパー